

2015年10月18日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書 11章 5～13節

説教 「祈りは聞かれる」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

わたしたちにも祈りを教えてください」との弟子たちの願いに、主イエスは「父よ」という呼びかけに始まるたいへん簡潔な祈りを教えてくださいました。「主の祈り」です。主イエスは、私たちに何を祈るべきかを教えてくださいました。それに続いて、主イエスは私たちがどのような心で祈るべきかをたとえ話を使って教えてくださいました（5～8節）。

このたとえ話には、知人・友人という関係で結ばれる三人の人が登場します。一人は真夜中に友人の家に到着する旅人です。真夜中に突然やってくるなんて何と非常識な人なのだろうと考えるかもしれませんが、当時は日中の暑さを避けて夜中や明け方に目的地に到着することはよくあったようです。あらかじめ連絡をしておくなどということも無理なことでした。旅人を迎えた人は、驚きましたが、追い返すようなことはしません。当時の社会で、旅人をもてなすことはたいへん大事なことでとされていました。しかし、いつ誰が来ても大丈夫なほど余分の食糧がある家は珍しく、彼は突然夜中に到着した友人をねぎらいもてなすために、近所のもう一人の友だちに助けを求めたのです。「友よ、パンを三つ貸してください。旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出するものがないのです」。もう一人の人は家の中からこう答えるのです。「面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません」。けれどもたとえ話はこう続きます。「その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう」。しつこく、しきりに願い求めたので願いがかなった、だから、神に願うときにも、一生懸命、あきらめないで祈ることが大切だということが語られ、それを受けて「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」という御言葉につながっていくというのが一般によくなされてきた解釈です。

ところが、このたとえ話には、従来のこうした読み方とは少し違う、もう一つの読み方があります。それは、戸を閉じた家の中の友人が、「起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません」などと答えるだろうか、という読み方です。文章は修辭的な疑問文で、「そんなことはありえない」「そんなバカなことがあるだろうか、断じてない」という答えを期待している文章だということです。あなただったらそんな冷たい態度に出るだろうか、まさかそうはしないだろう、そういう問いかけだということです。

この読み方のもう一つのポイントは、その後が続く「しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう」という文章の、「しつように頼めば」という言葉の訳し方です。この言葉は「恥知らず」という意味です。「恥知らずのゆえに」とだけ書いてあるのです。この「恥知らず」の中味を、しつこく頼むと取るのが従来の読み方

です。しかし、こんなに一生懸命に頼まれているのに、それを無視して断るほど恥知らずなことにはできないという読み方もできるのです。つまり、頼む人の態度ではなくて、頼まれる人が、面倒でも起き上がって来る動機が語られているというのです。そんな恥知らずで不義理なことができるか、本来のたとえ話のニュアンスはこうであったのではないかというのです。

このたとえ話からしつこいほどの熱心さを聴き取ることも確かにできるかもしれませんが。私たちの怠惰で怠慢で、すぐにあきらめてしまう態度に対して、神はどうしてもっと熱心に求めないのか、と嘆いておられるのだと読むことができますでしょう。

しかし、もし私たちがただしつこく願いさえすればいいのだと考えたり、しつこくなければ神さまは動いてくださらないのだと考えたりするなら、それは主イエスが語ろうとしておられることから、ちょっとずれてしまうのではないのでしょうか。主イエスが教えようとしておられることは、断られてもあきらめるなという人間的な叱咤激励と同じではないはずです。大事なものは私たちの人間的なしつこさではなくて、神に信頼して忍耐強く願い求めることなのです。

このような読み方が浮かび上がらせてくれる大事なことは、困っている友人を面倒だからと追い返すなどということが本来恥ずかしくてできないように、神は私たちが切に訴え祈る、その祈りに耳を閉ざしてしまわれるような恥知らずの神ではないということです。神はご自身の神としての名誉にかけても、私たちの願いに耳を傾けてくださるというのです。

しつこく頼んだらよいということ以上に、どんなに熱心に訴えるにしても忘れてならないことは、私たちのことをすべてご存じであり、私たちの祈りを聞いてくださる方への信頼です。聞かれるかどうか分からないけれど、言いたいことばかりをむやみやたらと一方的に言い募るのではなく、神がイエス・キリストにおいて私たちといかに憐れみ深く関わってくださるかを知る者として、すべてのことを聞いてくださる神への信頼の中で祈り続けることです。信仰と希望の中で、忍耐と勇気をもって祈ることなのです。

一連の教えの閉めくくりには、主イエスは私たちに約束してくださっています。「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(13 節)。聖霊が与えられるとは、私たちがいよいよ主イエスと結ばれることです。私たちを滅びへといざなう悪しき力や誘惑からしっかりと切り離され、神の愛の内にしっかりと守られるのです。